

伊勢物語の地の文における対人物ソ／コ系 指示語の使い分け

田 口 尚 幸

一 序

歌物語は他の物語類に比べて指示語を多く有しており、それに関する研究もいくつか提出されている。

たとえば、竹岡正夫氏は、伊勢物語におけるソ／コ／カ系指示語の「使用法」について、次のように述べている。

「そ」系は、文脈の中で既に触れた、事物や人などを指示する。従ってそれらの事物や人物等は、展開されている物語内の現場における事物や人物などとして措定し、物語ることになる。

「こ」系は、さような物語内の現場における、事物・人物などを、話し手や作者の現にいる場の事として認識している意を表す。従ってその場合、話し手・作者も、その物語内の現場に実際いるといった物語り方になる。そこから特に特立して指示している口吻にもなる。

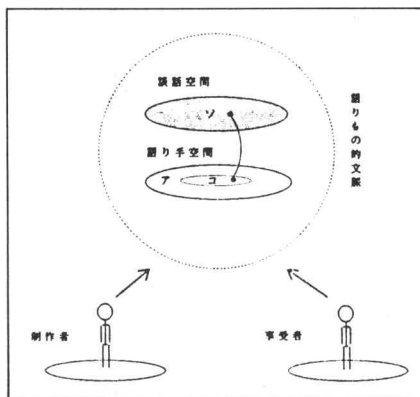
「か」系は、物語内の現場からあらたなる場の、事物又は人物などとして指示・措定する。又話し手（物語者）が聞き手（読者）と共通の認識に立っているものとして、「例の、あの」「さっきの、あの」といった気持で指示する言い方ともなる。

ソ系指示語は物語世界の人物・事物をその世界のものとして客観的に指し、コ系指示語は物語世界の人物・事物を語りの場に特立するように指し、カ系指示語は「例の」といった具合に指す―この解説は、常識的かつ妥当なものと思われる。

ちなみに、現代語についてではあるが、金水敏氏が「語りものの」―「論文・小説などの文脈」における指示語使用の様相をわかりやすく図式化している（『金水図』参照）。「制作者」は語り手、「享受者」は聞き手、「談話空間」は物語世界、「語り手空間」は語りの場、「ア」系指示語はカ系指示語に置き換えていいだろう。竹岡氏の言う「使用法」とも整合しそうである。

しかし、これで全てが解決するわけではない。「例の」とい

〈金水図〉



どのような文脈なのか。もちろん指示語の使用は語り手個人の癖や方法のちがいによっても左右されるだろうが、本稿では文脈とのかかわりに焦点を絞って考察を進めたい。対象とするのは、伊勢物語^(注3)（大和物語・平中物語も適宜参照する^(注5)）の地の文にある対人物ソ／コ系指示語である。対人物ソ／コ系指示語とは、「ソノ／コノ十人物」および「人物を指すソレ／コレ」の形のものを用いる。対事物のものを除いたのは、文脈に応じたソ／コ系指示語の使い分けが対人物のものの方により顕著に認められるからである。

うカ系指示語の場合はどういう文脈で用いられるか大體想像がつくものの、ソ／コ系指示語の場合は具体的に文脈に当たって調べてみる必要があるように思う。客観的に指示したくなるような文脈／特立したくなるような文脈とは、

二 先学の研究

はじめに、先学の研究を確認しておきたい。

辛島稔子氏は、片桐洋一氏の伊勢物語成立論にもとづいて伊勢物語を第一・二・三次章段に三分し、ソ／コ系指示語の使用数が異なることを指摘し（〈辛島表〉参照）、その原因を「作者の癖、または文体的な相違」に求めた。辛島氏は文脈に応じてソ／コ系指示語を使い分けなければならない必然性はないと断定しており、全ては成立の次元のちがいに起因すると考えている。

〈辛島表〉

第三伊勢			第二伊勢			第一伊勢			作 品 名 指示 代 詞 名	
31	12	10							こ	近 称 (コレ系)
2	4	2							これ	
0	0	1							これ(かれ)	
1	1	1							ここ	
34	16	14							合計	中 称 (ソレ系)
5	16	19							そ	
2	4	6							それ	
4	1	3							そこ	
11	21	28							合計	

片桐氏は、辛島説を補訂し、より積極的に自らの成立論に結び付けようとした。片桐氏は、第一・二次章段と第三次章段の

間で対人物ソ／コ系指示語（片桐氏は「ソノ／コノ十人物」の形のみに限定している）の使用数が異なると指摘した（〈片桐表〉参照）。「ソノ十人物」の形は、漢数字で示した第一・二次章段のみにあり、「コノ十人物」の形は、第一・二次章段よりアラビア数字で示した第三次章段に多い。片桐氏は、この分布から、文脈とのかかわりは無視して、次のような結論を導き出した。

〈片桐表〉

その男……一・九・六九・九四・一〇七	
その女……二	
その人……二・八二・一〇一	
その親王……三九・四三	
その帝……三九	
その母……八四	
この男……一・二三・二四・四五・四七・五八・六〇・六五・八七	
この女……二一・二三・四〇・四三・五八・六三・六五・九六・一一五	
この人……六三	
この帝……六五	
このむこがね……一〇	
この馬の頭……八三	

第一次第二次「伊勢」の作者は、都から離れた土地を「そこ」とか「その里」と呼んだのと同様に、物語の登場人物の事績を「昔」という時間的彼方に押しやり、みずからが伝えようと伝えまいと、物語の内容は過去に厳然として存したことからして伝え、みずからはサービシ的にコメントを加えるだけという「伝承者の姿勢」に終始していることが、あらためて確認されるのである。

—中略—

「その——」を全く用いず、「この——」を頻用する第三次「伊勢物語」は、登場人物を「昔」へ押しやり、語り手がいようがいまいが、その「昔」の世界は厳然として存在し、語り手はその世界を物語として伝えるだけという第一次・第二次の「伊勢物語」の方法とは違って、「昔」という虚構世界を、いわば招呼の間におさめ、語ること書くことによってリアリティを確立してゆく（小説の方法）に近づいて来ていることを明確に示しているのである。

神谷かをる氏は、成立の次元のちがいのみに注目する辛島氏・片桐氏とはちがって、文脈とのかかわりについて言及している。少々長くなるが、プライオリティーの問題があるので、該当箇所を全てあげておく。

伊勢物語は、「昔男ありけり」などで始まる形が多く、その男は、どういう男かは以下に述べられるのであって、何の説明もなく、いきなり普通名詞「男」で紹介される形式

をとる。その抽象的な男は、「その男……」となつてはじめて具体的に描かれてゆく。抽象的一般的な男は、まだ説明も何もされていず、「この男」「かの男」として特立されるべき内容をまだ知らされていない。したがつて特立機能の少ない「ソノ」の方がふさわしいと思われる。伊勢物語は、昔男を一般的抽象的に提示して、以下に次々と具象化してゆくのであるから、「その男」のみならず、「その沢」「そこ」というように、上の部分を要約しつゝ、下へ描写を広げてゆく方法をとらざるをえない。その場合、客観的に、語り手が語りの位置をとろうとすると、「コノ・カノ」よりは「ソノ」がよい。なぜなら、「コノ・カノ」を用いると、語り手は「コ・カ」の持つ、語り手からの方向指示作用によつて、語りの時点へ「この男」なり「コノ」で修飾される語をひきだしてくる。語りの現時点にクロージアアップさせるのである。そこに語り手の関心度が出て、聞き手へ直接提示して、登場人物や物、そして語り手・聞き手とを一つの同じ場に並べてしまう。——中略——ゆえに、物語の内容の時点に従つて、語り手が、客観的位置で述べらるゝなら、ソ系になつてゆくだろう。そして昔男がいろいろ説明され、知られるにつれ、「この男・かの男」と特立されても聞き手はついてゆける。

要するに、特立されるべき内容が知らされていない／知らされている、というちがいが、ソノ男／コノ男の使い分けを決定す

るといのである。また、神谷氏は、

なぜ第一次（私注―第一章段）にのみそれほどソ系が多いのか。

と、辛島氏・片桐氏と同じ問題設定をして、

第一伊勢は、聞き手をそれほど意識せずに書こうとし、第二・第三になるにつれ、聞き手をめざして語るように書くことが出来るように文章に慣れてきたからではなからうか。という答えを示している。文脈とのかかわりに注目しながらも、結果的には、片桐説に歩み寄っているのである。

神尾暢子氏は、^(注10) 文脈とのかかわりのみに注目し、成立論派と対立している。神尾氏は、対人物ソ／コ系指示語（神尾氏は「ソノ／コノ十人物」の形のみに限定している）が使い分けられる基準として、次の二点をあげている。

指示対象である人物呼称を明示する一文と、その人物呼称を指示語で規定する一文とは、接近する。「その男」の場合は隣接し、「この男」の場合は近接するところに、「こそ」の相違があるといえようか。

——中略——

「この」の指示対象は、行動の主体となる人物で、「その」の指示対象は、存在の主体となる人物であつた。

前者はソノ男／コノ男のみについで、指示対象を明示する文とソノ／コノを含む文の位置関係が使い分けの一基準になると述べている。後者は男のみならず「ソノ／コノ十人物」

という形全般についての言及で、指示対象がたとえば「ありけり」といった存在の形で示されているか／たとえば「いにけり」といった行動の形で示されているか、ということの意味しているらしい。

総括すると、成立論にこだわる辛島説・片桐説と、文脈とのかかわりを考える神谷説・神尾説の二派に大別できる。

本稿では、まず、文脈とのかかわりの有無について検討する。神谷説の、特立すべき内容が知らされていない／知らされているという基準、神尾説の、指示対象を明示する文と指示語を含む文が隣接／近接、指示対象が存在の主体／行動の主体という基準を検討し、三つ全てが首肯できるようなら、なぜそうなるかを総合的に考え、例外や新事実が見つかるようなら、それらをも含めた説明を試みたいと思う。

そして、辛島説・片桐説および神谷説の成立論的解釈については、本当に辛島氏・片桐氏の設定した段階ごとにソ／コ系指示語の分布が異なるか否かを確かめておきたい。ただし、分布状況を確認するだけにとどめる。もし成立論と符合する傾向が認められたとしても、その是非や原因説明については、他の項目を広く調べてからにしたい。

三 神谷説・神尾説の検討

神谷説・神尾説の三つの基準の検討に入る前に、その適用範

囲を確認しておきたい。神谷説の、特立すべき内容が知らされていない／知らされているという基準は、ソノ男／コノ男を中心に据えているが、他の人物や「人物を指すソレ／コレ」を視野に入れていのかどうかはよくわからないものだった。神尾説の、指示対象を明示する文と指示語を含む文が隣接／近接という基準は、ソノ男／コノ男に限定したものだった。同じく神尾説の、指示対象が存在の主体／行動の主体という基準は、「ソノ／コノ十人物」に限定したものだった。本稿が対象とするのは「ソノ／コノ十人物」および「人物を指すソレ／コレ」であり、神谷説・神尾説の三つの基準も全てその範囲内で検討するものとする。末尾に掲載した〈表1・1・1〉には伊勢物語・大和物語・平中物語の地の文における「ソノ十人物」および「人物を指すソレ」の例をあげ、同じく末尾掲載の〈表2〉には伊勢物語の地の文における「コノ十人物」および「人物を指すコレ」の例をあげた（「人物を指すソレ／コレ」の場合には薄いトーンをかけた）。

なお、ソノ・ソレ／コノ・コレの使い分けの理由が内容から想像できるものや例外とした方がいいものについては、濃いトーンをかけて区別しておいた。これまでの研究では、全ての例を同列に論じたり、あるいは、基準に適合しない例が出てきた場合にかぎってその理由を考えたりしていたが、それでは大まかすぎるのではなからうか。ソノ・ソレ／コノ・コレは、様々な理由によって使い分けられているはずである。たとえば、ソ

ノには、「誰ソレ」の意の、明示しない用法がある。〈表1〉では(7)・(18)、〈表1〉では(16)が該当する。また、会話文・心話文の場合は、会話・心話の主である登場人物と指示対象の空間的・心理的距離の遠近によって使い分けがなされる。〈表1〉(3)・(16)・(27)、〈表1〉(8)・(9)・(10)・(17)、〈表2〉(5)・(6)・(15)・(23)・(24)・(26)・(32)・(37)が、該当する。その他、〈表1〉(13)は「時世経て久し」ということで時間的距離感を出すソノを用いたのだろう。〈表1〉(14)は筑紫の檜垣の御を指すということで空間的距離感を出すソレを用い、同(23)・(24)・(26)は、うまく説明できないが、コ系は不適当でソ系しか入らない場面だから、ソノ・ソレを用いたのだろう。〈表1〉(14)はもう一人の男Ⅱ「この男」との差別化をはかってソノを用いたのだろう。〈表2〉(2)・(27)は男性一般のなから「むこがね」・「人」を特定しているから、特立機能の強いコノを用い、同(11)は言述直示に向くコレを用い、同(38)は後注の書き出しの常套的表現であるコレハをやはりここでも用いたのだろう。いずれもソノ・ソレ／コノ・コレを使い分けるだけの内容的裏付けがあるように思う。例外とすべきものとしては、〈表1〉(2)と〈表2〉(42)をあげたい。前者は前で述べたことをソで受けてソレ・ノの意をあらわす形のソノであり、後者は慣用的表現なので、本稿では例外として扱う。

では、残った例から、まずは神谷説を検討してみよう。〈表3〉は、〈表1〉・〈表2〉で除外されなかった例の通し番号

とソノ・ソレ／コノの日本古典文学全集における行数をあらわしたものである。神谷説に従えば、伊勢物語においては、特立すべき内容が知らされていない頃すなわちはじめの頃にはソノ・ソレが多いはずで、特立すべき内容が知らされている頃すなわちストーリーが進展している頃にはコノが多いはずである。^(注15)

〈表3〉

ソ 系		コ 系			
番号	行数	番号	行数	番号	行数
(1)	5	(1)	3	(28)	4
(2)	2	(3)	7	(29)	10
(3)	3	(4)	17	(30)	15
(4)	4	(7)	5	(31)	24
(5)	2	(8)	14	(33)	28
(6)	1	(9)	17	(34)	29
(8)	1	(10)	4	(35)	33
(9)	2	(12)	2	(36)	35
(10)	1	(13)	6	(39)	4
(11)	1	(14)	7	(40)	6
(12)	2	(16)	8	(41)	7
(14)	24	(17)	2	(43)	9
(15)	2	(18)	3	(44)	2
(16)	2	(19)	5		
(17)	1	(20)	8		
(19)	2	(21)	11		
(20)	1	(22)	3		
(21)	1	(25)	5		

確かに、〈表3〉を見ると、ソ系の行数は概して小さく(14)の24行目は際立って他と異なるが、指示対象の紀有常の名は23行目ではじめて出てくるので、例外としていいだろう。コ系の行数は概して大きい。神谷説は、はずれてはいない。しかし、厳密とも言えない。ソ系では、(1)の5行目、(3)・(4)の3・4行目

という例もある。(1)の男も、(3)・(4)の女も、特立されていい程度の情報は付与されている(例証は省略する)。また、コ系では、(12)の2行目、(17)の2行目、(22)の3行目、(44)の2行目が気になる。(12)の女、(17)の男、(22)の男、(44)の女には、いずれも、たいした情報は付与されていないし、情報量言うなら、(31)の帝も、24行目ではあるが、それまでに説明らしい説明は殆どされていない(例証は省略する)。神谷説を全面的に首肯することはできない。神尾説の、指示対象を明示する文と指示語を含む文が隣接／近接という基準は、どうだろうか。やはり、はずれてはいないが、基準と言えるほどのものでもない。そもそも、隣接／近接のちがいがよくわからない。近接のなかに隣接が含まれるなら、区別の基準とはなり得ない。また、「一文」を単位とするのは危険である。長くてなかなか切れない文はどう考えるのか。指示対象を明示する文と指示語を含む文が近接するというコノ男の場合、および、男以外の「コノ十人物」の場合を調べてみると、指示対象を明示する「一文」と指示語を含む「一文」が隣接する例や同じ「一文」中に指示対象と指示語が共存する例を見出すことができる(例証は省略する)。(表2)の番号で言え

ば、(7)・(8)・(9)・(10)・(12)・(13)・(17)・(18)・(19)・(20)・(21)・(29)・(33)・(35)・(41)・(43)が該当する。基準そのものがあいまいなために、明確に区別できないのである。確かに、対人物ソ系指示語の場合には指示対象とソノ・ソレが近く、「隣接」という点に関しては当たっているし、対人物コ系指示語の場合は指示対象とコノが

比較的離れている。傾聴に価する説ではある。基準をより厳密なものにし、かつ、なぜそうなるかを考えることが、課題となるだろう。

神尾説の、指示対象が存在の主体／行動の主体というもう一つの基準も、調べてみよう。確かに、〈表1〉の対人物ソ系指示語直前部を見ると、存在の主体であることを示すアリとその尊敬語が多い。(2)・(5)・(6)・(8)・(9)・(10)・(11)・(12)・(17)・(19)・(20)・(21)が、該当する。また、(14)の「仕うまつれり」も同類と見なしていいだろうし、(3)・(4)・(15)も、どのような人物であるかを説明しているだけだから、存在の主体と考えていいだろう。すると、残るは、(1)・(16)のみとなる。こうした傾向は、伊勢物語のみならず、〈表1〉の大和物語・〈表1〉の平中物語にも、多少の差こそあれ認められる。しかし、明らかにはずれている例があることもまた事実である。〈表1〉(1)の「歌を書きてやる」、〈表1〉(13)の「かへりなむとしけり」、同(22)の「いきけり」、同(28)の「語らひたまひける」、〈表1〉(3)の「いひおこせたらば」、同(4)の「いひたる」、同(5)の「いひけり」は、指示対象が行動の主体であることを確実に示している。そして、さらに重大な問題は、対人物コ系指示語の指示対象のなかに行動の主体と決めるものが含まれることである。前述のとおり、対人物コ系指示語の場合には指示対象と指示語が比較的離れているため、〈表2〉では指示対象まで表示しきれないが、番号だけをあげるならば、(12)・(13)・(14)・(17)・(18)・(19)・(22)・(28)・(40)・(44)と、かなり

の数になる。これらは、目的語として提示されているだけのものや、いる・住んでいるといった内容のもので（その人物の置かれている状況や身分の説明がつづくこともある）、行動の主体とは言い難い。つまり、指示対象が存在の主体／行動の主体という基準は、参考にすべきではあるが、完全に信頼しきつていいというわけでもないのである。隣接／近接の場合と同じく、基準をより厳密なものにし、かつ、なぜそうなるかを考えなければならぬだろう。

神谷説・神尾説の三つの基準はごく大まかには認められたが、説明のつかない例は少なからずあった。また、神尾説には原理的な説明が欠けていた。そして、三つの基準はそれぞれ独立しており、三者間の相互関係についての言及もなかった。残された問題は、多い。

四 非転換／転換という基準

ここで、視点を変え、非転換／転換という新たな基準を突破口として、総合的かつ原理的な説明をめざそうと思う。

〈表1・1'・1〉と〈表2〉の右端に「焦点となる人物」という欄を設けた（あらかじめ区別した濃いトーンの部分は除く）。これは、対人物ソ／コ系指示語直前部からソノ／ソレ／コノ／までの間で焦点となる人物がどのように変化しているかを示したものである。〈表1〉は全てA↓Aという形で、A↓Bと

いう形はない。〈表1'・1〉も基本的に全てA↓Aと見ていい。斜体字で示した〈表1'〉(8)・(18)と〈表1'〉(5)・(12)はA・B↓Aという形であるが、まさに直前部において聞き手がイメージするのはA・B両方なので（あるいはAのイメージの方が強いかもしれない）、A↓Aという流れは生きている。同じく〈表1'〉(21)と〈表1'〉(13)はA↓B↓Aという形であるが、A↓A間のBは付加的に説明されているだけなので、A↓Aのラインを中心に考えるべきである。同じく〈表1'〉(1)はA・C↓B・Cという対の形でとらえるべきなので、Cに関しては転換していないと言える。〈表1'・1'〉の斜体字の七例は、純粋なA↓Aではないが、問題とはならない。一方、〈表2〉は、斜体字の(3)・(30)以外、全てA↓Bという形である。なお、もしもつと広い見方をすれば、B・A↓Bという形になるものも出てくるが、この場合、まさに直前部において聞き手がイメージするのはAであり、B↓Bという流れは一旦切れてしまうので、〈表1'・1'〉のA・B↓Aと同様に考える必要はないし、また、B↓A↓Bという形になるものなかにもB↓B間のAが付加的なものはないので、〈表1'・1'〉のA↓B↓Aと同列に論じなくてもいい。〈表2〉は、おおむね、A↓Bと見ていい。

となると、〈表2〉(3)・(30)はどう考えたらいいのだろうか。現時点では明確に説明できないが、〈表1〉諸例と〈表2〉(3)・(30)のちがいをあげ、おおよその見当をつけることはできる。両者のちがいとしては、まず、指示対象が近くに明示されてい

る／いないというちがいがあ。前者は(4)以外全て「直前部」の欄内に指示対象が明示されているし、(4)とて日本古典文学全集では1行前に明示されている。一方、後者は、(3)が全集で6行前、(30)が全集で11行前と、かなり離れている。また、直前部と指示語の間に緊密な繋がりがある／一区切りあるというちがいもある。前者のうち、(1)は直前部の説明不足をソノ以下で補っており、(16)は直前部の「月を見て」がソレ以下の月を詠んだ歌に直結している。その他の例は、直前部で対象をアリ・ナリ型でひとまず提示だけしておいて、直後のソノ・ソレ以下で対象にまつわる詳しい説明をしている。一方、後者を見ると、(3)は、直前部の「いでていにけり」で一つの場面が終わって、一区切りあるし、(30)も、直前部の「かくかたはにしつつありわたる」という場面がまずあって、その次の場面としてコノ以下の仏神への祈りがくるわけだから、やはり、一区切りある。以上の二点から、同じ非転換型(A↓A)でも、真の非転換型(A↓A)とそれほどでもない非転換型(A↓A)のちがいがあることがわかる。おそらく、そのちがいが、ソノ・ソレ／コノのちがいとなってあらわれているのではなからうか。

対人物ソ／コ系指示語直前部からソノ・ソレ／コノ／までの間で焦点となる人物が転換しない／転換するという基準は、神谷説・神尾説でとらえきれなかった例にも適用できる。ちなみに、大和物語・平中物語になると事情が少しちがってくるが、それでも、おおむね適用できるし、伊勢物語の編纂態度にかぎ

って見れば、問題はない。

では、以下、非転換／転換という新たな基準と神谷説・神尾説の三つの基準を統合し、原理的なところまで踏み込んで、説明を試みよう。

〈対人物ソ系指示語の場合〉

○特立すべき内容が知らされていない

○指示対象が存在の主体

指示対象がただ単に提示されているだけで、具体的な行動の説明を待っている、宙ぶらりの状態。

○指示対象を明示する文と指示語を含む文が隣接

前文で指示対象が提示されたのであれば、次文でそれにまつわる具体的な説明をしなければならない。よって、指示対象を明示する文と指示語を含む文は隣接することになる。

○直前部からソノ・ソレまでの間で焦点となる人物が転換しない

「隣接」ということをより正確に言えば、「非転換」ということになる。直前部からソノ・ソレまでの間で、焦点となる人物が転換することはない。直前部での説明不足を補う形でソノ・ソレ以下があるわけだから、転換しては困る。換言すれば、対人物ソ系指示語には、聞き手の意識をその場にとどめ、積極的な展開

を阻むような役割がある、とも言える。

〈対人物コ系指示語の場合〉

○特立すべき内容が知らされている

○指示対象が行動の主体

指示対象の具体的な行動が描かれている状態。宙ぶらりの状態ではないから、指示対象の行動の直後に別の人物・場面がきてもかまわない。

○指示対象を明示する文と指示語を含む文が近接

指示対象を明示する文と指示語を含む文の間に別の人物・場面の情報が入り込めば、結果的に両文の間隔は少し広がる。

○直前部からコノ／＼までの間で焦点となる人物が転換する

「近接」ということをより正確に言えば、「転換」ということになる。直前部からコノ／＼までの間で、焦点となる人物（場面）は転換する。換言すれば、対人物コ系指示語には、それまでの聞き手の意識を一旦切り、新たな展開へと導くような役割がある、とも言える。

五 ソ／コ系指示語の分布

以上のように、伊勢物語においては、文脈に応じて対人物ソ／コ系指示語が使い分けられているのであるが、だからと言っ

て、〈辛島表〉・〈片桐表〉の奇妙な分布をただちに無視していいということにはならない。私は片桐氏の段階分けに疑問をもっており、両表の有効性についても懐疑的であるが、両表が奇妙な分布を示していることは事実であり、それは検討すべき対象であると思っている。本稿ではまだ本格的な検討にとりかかれませんが、とりあえず、各章段における指示語の分布をより正確に把握しておきたい。そうすれば、問題点がより明確になるだろう。

末尾に掲載した〈表4〉は、伊勢物語の各章段の地の文におけるソ／コ／カ系指示語の数をあらわしたものである（対事物のもの数はカッコで囲んだ）。なお、指示語の多寡は地の文の長短とも関係しているので、「長さ」という欄を設けた。また、〈辛島表〉・〈片桐表〉とのかねあいもあるので、片桐氏の段階分けを示しておいた（念のため断っておくが、私は片桐氏の段階分けを認めているわけではない）。濃いトーンをかけたものは第一次章段、薄いトーンをかけたものは第二次章段、ノーマルなものは第三次章段を意味する。〈表4〉を見るかぎりでは、確かに、第一次章段にはソ系が多くてコ系が少なく、反対に、第三次章段にはソ系が少なくコ系が多い。そして、第二次章段は、両者の中間的な数値を示す。もちろん、特定の章段に指示語が集中しているという点や、統計的なことを言えるだけの数かという点は考慮しなければならないだろうが、それでもなお気になる分布である。

〈表5〉

		第一次章段		第二次章段		第三次章段		全 体	
非転換型 (A→A)	ソ系	9	19%	8	20%	1	1%	18	10%
	コ系	0	0%	0	0%	2	2%	2	1%
	カ系	0	0%	1	2%	1	1%	2	1%
	ナシ	3	6%	2	5%	4	4%	9	5%
	小計	12	25%	11	37%	8	9%	31	17%
転換型 (A→B)	ソ系	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
	コ系	3	6%	6	15%	20	22%	29	16%
	カ系	8	17%	5	12%	3	3%	16	9%
	ナシ	25	52%	19	46%	60	66%	104	58%
	小計	36	75%	30	73%	83	91%	149	83%
合 計		48	100%	41	100%	91	100%	180	100%

〈表5〉は、〈表4〉を補足するものである。これは、伊勢物語から、「ソノ／コノ十人物」および「人物を指すソレ／コレ」と、指示語を用いても別に悪くはないのに用いていない人物呼称を抜き出し、〈表1〉・〈表2〉の濃いトーンで区別された例を除いたうえで、全例を非転換型(A↓A)^(注22)／転換型(A↓B)^(注23)でまず二分し、どのような指示語を用いているか(ソ／コ／カ系)あるいは用いていないか(ナシ)でさらに四分したもので、片桐氏の段階分けについても、〈表4〉同様、参考までに示してある。〈表5〉を見ると、前節で示した「対人物ソ系指示語≡非転換／対人物コ系指示語≡転換」という図式を確認できる。ソ系を用いるべき非転換型(A↓A)では、ソ系が過半数を占め(18/31)、コ系は前節で真の非転換型でないとした〈表2〉(3)・(30)の二例のみである。一方、コ系を用いるべき転換型(A↓B)では、ソ系が全くなく、コ系が指示語ナシを除けば最も多い(29/149)。また、〈表4〉では指示語を用いている例についてしかわからなかったが、〈表5〉では指示語を用いていない例についても知ることができる。指示語を用いていないということは、対人物ソ／コ系指示語を用いるべき文脈自体がなかったということなのか、あるいは、対人物ソ／コ系指示語を用いるべき文脈がありながら用いなかったということなのか。〈表5〉に、それを知る手がかりが示されている。第三次章段にはソ系が殆どないが、これは、ソ系を用いるべき文脈自体がかなり少なかった(9%)ということと密接に関係してい

るだろう。一方、第一・二次章段においてコ系があまり用いられていないのは、コ系を用いるべき文脈がありながら（75%・73%）^{（注24）}用いなかった、という語り手の姿勢が大きく反映しているだろう。なお、〈表5〉^{（注25）}ではうまく示せなかったが、非転換型の指示語ナシの例のなかには、前節で述べたA↓Aに該当するものは見当らなかった。これは、対人物ソ系指示語がA↓Aというかなり限定された条件下でのみ用いられているという前節の結論を裏付けるものであり、注目される。

〈辛島表〉・〈片桐表〉に影響され、〈表4〉・〈表5〉を作成したのであるが、特に〈表5〉を見て、伊勢物語における指示語の奇妙な分布については文体そのものを調べてからでないとも言えないと感じた。各章段ごとの文体のちがいを究明することが今後の課題となった。

六 結び

伊勢物語においては、対人物ソ／コ系指示語とその近辺の文脈との間に奇妙な関係が存在した。

神谷説・神尾説の三つの基準は、ごく大まかにではあるが、認められた。そして、それらの基準を包括するものとして、非転換／転換という基準がはっきりと認められた。「ソ系」客観的に指示する／コ系「特立して指示する」といった単純な図式ではとらえきれない、細かな基準があったのである。

また、人物呼称近辺の文脈を調べてみると、章段によって非転換型（A↓A）／転換型（A↓B）の比率が異なることがわかった。それが成立論と結び付くか否かはわからないが、とにかく、一度文体そのものを詳しく調べてみなければならなかった。

結局、本稿は中間報告のような形になってしまった。いずれ、続編を書かねばならないだろう。

（注）

1 『伊勢物語全評釈』昭和62・4 右文書院26、27頁。

2 「日本語における心的空間と名詞句の指示について」（大阪女子大学「女子大文学国文篇」昭和63・3）。

3 本文は、天福本を底本とする日本古典文学全集によった。

なお、『伊勢物語に就きての研究』・『伊勢物語校本と研究』によって異同を調べたところ、ソノがカノになつてゐる例が一例、コノがカノ・アノになつてゐる例が三例認められた。ただし、これらは広本系・塗籠本などに見られる異同なので、それほど気にしなくてもいいと思われる。

4 本文は、天福本を底本とする日本古典文学全集によった。

なお、『大和物語本文の研究』によつて異同を調べたところ、ソノがカノになつてゐる例が二例、ソノがコノになつてゐる例が二例認められたが、これらは御巫本・鈴鹿本・勝命本などに見られる異同なので、それほど気にしなくてもいいと思われる。また、ソレがコレになつてゐる例が一例認められたが、これは天福本・勝命本以外

- 15 全てコレになっているので、注意しなければならない。ただし、後述するように、使用法からするとソレでいいと思われる。
- 14 本文は、静嘉堂文庫本を底本とする日本古典文学全集によった。
- 13 「伊勢物語の三元的成立の論」(「文学」昭和36・10)。
- 12 「伊勢物語の成長に関する覚え書」図書寮本異本業平集をめぐって―(「国語国文」昭和33・7)。
- 11 「伊勢物語の新研究」昭和62・9明治書院86頁93頁。
- 10 ちなみに、近年発表された田中順子氏「伊勢物語の成立―作者の視点を手がかりとして―」(お茶の水女子大学「国文」平成2・7)は、片桐説を支持するものだった。
- 9 「物語文章史と指示語」(大阪大学「語文」昭和56・12)。
- 8 「伊勢物語の指示表現」(大阪教育大学国語学第一研究室「国語表現研究」昭和61・12)。
- 7 橋本四郎氏「指示語の史的展開」(「講座日本語学2文法史」昭和57・4明治書院)馬場俊臣氏「指示語―文脈指示のコ系・ソ系の使い分けについて」(北海道教育大学「語学文学」平成3・3)などを参照した。
- 6 コレについては、先程全て区別すべきとされたので、以後とりあげない。
- 5 挿絵の箇所には相当分の字数を詰め、適正をはかった。
- 4 若林玲子氏「『竹取物語』の地の文におけるソ系指示語」(富山女子短期大学「秋桜」昭和63・3)によれば、竹取物語にはそうした傾向が認められるという。
- 3 「雅平本業平集の編纂態度―その詞書の生成過程と典拠資料についての考察―」(「三田国文」昭和63・6)、「狩使本伊勢物語の二部
- 25 的構造―現存業平集と伊勢物語の関係についての考察―」(「中古文学」平成1・5)、「狩使本伊勢物語について―その断片資料に見る新しさ―」(「中古文学」平成2・12)、「伊勢物語歌の『業平歌らしき』―新古今集・新勅撰集の採歌態度についての考察―」(「解釈」平成2・1)などを参照された。
- 24 岩波文庫(底本は全集と同じ天福本)を用いたのは、歌が一行書きで表示しやすく、しかも、挿絵がないからである。
- 23 片桐氏が『鑑賞日本古典文学伊勢物語・大和物語』昭和50・11角川書店15頁において第一次章段と指定したものだ。ただし、9・82・83・87段については一部分のみが第一次の成立であるとされているが、本稿では、便宜上、それら章段全体を第一次章段として示した。
- 22 片桐氏が同右書15・16頁において第二次章段と指定したものを、便宜的に、全て第三次章段として示した。
- 21 既にその種の批判はある。福井貞助氏『伊勢物語生成論』昭和40・4有精堂250・251頁参照。
- 20 初出のものや、たとえば「みな人」(9段)といった類のものは、ソノ／コノを付けられないと思われるので、数に入れなかった。
- 19 機械的に分類してあるので、A↓Aばかりでなく、(A)↓Aまでを含んでいる。
- 18 同じく機械的に分類してあるので、A・B↓A、B・A↓B、A↓B↓A、B↓A↓Bなどを全て含んでいる。
- 17 代表的な例としては、69段をあげておきたい。
- 16 それぞれの例を表示することは省略するが、非転換型の指示語ナシの例が含まれると見なした章段を言えば、1・24・63・69・86・96

・107段となる。

付記

本稿は学内・学外の研究会で何度か口頭発表したものをまとめたものであるが、その際、先学諸氏から貴重な助言を賜わった。また、学内の国語学専門の諸氏には折にふれ何かとご教示いただいた。厚く御礼申しあげる。

番号	章段	対人物ソ系指示語の直前部	「ソノ+人物」～・「人物を指すソレ」～	焦点となる人物
(1)	1	男の、着たりける狩衣の裾をきりて、歌を書きてやる。	その男、信夫摺の狩衣をなむ着たりける。	男→男
(2)	2	～西の京に女ありけり。	その女、世人にはまされりけり。	女→女
(3)	2	その女、世人にはまされりけり。	その人、かたよりしは心なむまされたりける。	女→その人＝女
(4)	2	(女ハ)ひとりのみもあらざりけらし。	それをかのまめ男、うち物語らひて～	女→それ＝女
(5)	4	～西の対に、すむ人ありけり。	それを、本意にはあらで、むざしふかりける人、ゆきとぶらひけるを～	人→それ＝人
(6)	9	むかし、男ありけり。	その男、身をえうなきものに思ひなして～	男→男
(7)	9	～(男二トッテ修業者ハ)見し人なりけり。京に、	その人(＝誰ソレ)の御もとにとて、(男ハ)文かきてつく。	※明示しない用法
(8)	3 9	むかし、西院の帝と申すみかどおはしましけり。	そのみかどのみこ、たかい子と申すいまそがりけり。	帝→帝
(9)	3 9	そのみかどのみこ、たかい子と申すいまそがりけり。	そのみこうせたまひて～	みこ→みこ
(10)	4 3	むかし、賀陽の親王と申すみこおはしましけり。	その親王、女を思し召して～	親王→親王
(11)	6 9	むかし、男ありけり。	その男、伊勢の国に狩の使にいきけるに～	男→男
(12)	7 7	～多賀幾子と申すみまそがりけり。	それうせたまひて～	多賀幾子→それ＝多賀幾子
(13)	8 2	～(親王ハ)右の馬の頭なりける人を、常に事ておはしましけり。時世経て久しくなりければ、	その人の名(ヲ語り手ハ)忘れにけり。	※時間的距離感
(14)	8 2	紀の有常、御供に仕うまつれり。	それが返し～	有常→それ＝有常
(15)	8 4	～母なむ宮なりける。	その母、長岡といふ所にすみたまひけり。	母→母
(16)	8 8	むかし、いと若きにはあらぬ、これかれ友だちども集りて、月を見て、	それがなかにひとり～	友達ども→それ＝友達ども
(17)	9 4	むかし、男ありけり。いかがありけむ、	その男すまざるにけり。	男→男
(18)	9 6	～かならずあはむ」と(女ハ男二)いへりけり。秋まつころほひに、ここかしこより、	その人(＝誰ソレ)のもとへ(女ハ)いなむなりとて、(ここかしこノ人々ノ)口舌いできにけり。	※明示しない用法
(19)	10 1	むかし、左兵衛の督なりける在原の行平といふありけり。	その人の家によき酒ありと(人々ガ)聞きて～	行平→その人＝行平
(20)	10 7	むかし、あてなる男ありけり。	その男のもとなりける人を、内記にありける藤原の敏行といふ人よばひけり。	男→男
(21)	11 0	むかし、男、みそかに通ふ女ありけり。	それがもとより～	女→それ＝女

番号	章段	対人物ソ指示語の直前部	「ソノ十人物」～・「人物を指すソレ」～	焦点となる人物
(1)	4 1	また、このおとどのもにと、よぶこといふありけり。	それももののあはれ知りて～	よぶこ→それ＝よぶこ
(2)	5 8	～閑院の三のみこの御むすこにありける人、黒塚といふ所にすみけり。	そ(＝閑院の三のみこの御むすこにありける人)のむすめどもに(兼盛ハ)おこせたりける。	※そ(＝人)十の
(3)	5 8	そのむすめどもに(兼盛ハ)おこせたりける。～といひたりけり。かくて、	「そのむすめをえむ」と(兼盛ガ娘ノ親ニ)といひければ～	※会話文(人物と対象の距離)
(4)	6 9	忠文が陸奥の国の將軍になりて下りける時、	それがむすこなりける人を、監の命婦、しのびてあひ語らひけり。	忠文→それ＝忠文
(5)	10 1	近江の守公忠の君、掃部の助にて蔵人なりけるころなりけり。	その掃部の助に(少将ガ)あひていひけるやう～	掃部の助→掃部の助
(6)	10 3	～武蔵の守のむすめになむありける。	それなむいとごきかいねり着たりける。	娘→それ＝娘
(7)	10 3	それ(＝娘)なむいとごきかいねり着たりける。	それをと(平中ハ)思ふなりけり。	それ→それ
(8)	10 3	それ(＝娘)をと(平中ハ)思ふなりけり。されば	その武蔵(＝娘)なむ、のちは(平中ニ)返りことはして～	それ＝娘・平中→武蔵＝娘
(9)	10 8	南院のいま君といふは、右京の大夫宗子の君のむすめなり。	それ、おほきおとどの内侍の督の君の御方にさぶらひけり。	いま君→それ＝いま君
(10)	10 8	それ(＝いま君)、おほきおとどの内侍の督の君の御方にさぶらひけり。	それを兵衛の督の君、あや君と聞えける時、曹司にしばしばおはしけり。	それ＝いま君→それ＝いま君
(11)	12 2	～増喜君といふ法師ありけり。	それは比叡にすむ、院の殿上もする法師になむありける。	増喜君→それ＝増喜君
(12)	12 2	それ(＝増喜君)は比叡にすむ、院の殿上もする法師になむありける。	それ、このとしこ、まうでたる日、志賀にまうであひにけり。	それ＝増喜君→それ＝増喜君
(13)	12 2	いまは、としこ、かへりなむとしけり。	それに、増喜のもとより～	としこ→それ＝としこ
(14)	12 6	～(檀垣の御ハ)物の具もみなどらはてて、いみじうなりけり。かかりとも知らで、野大式、肘手の使に下りたまひて、	それが家のありしわたりをたづねて～	※空間的距離感
(15)	13 9	先帝の御時に、承香殿の御息所の御曹司に、中納言の君といふ人さぶらひけり。	それを、故兵部卿の宮～	中納言の君→それ＝中納言の君
(16)	14 1	さて、この男、「女、こと人にもいふ」と聞きて、	「その人とわれと、いづれをか思ふ」と(女ニ)問ひければ～	※会話文(人物と対象の距離)
(17)	14 6	～南院の七郎君といふ人ありけり、	それなむ、このうかれめのすむあたりに、家つくりてすむと(帝ガ)聞しめして～	七郎君→それ＝七郎君
(18)	14 6	～それ(＝七郎君)なむ、このうかれめのすむあたりに、家つくりてすむと(帝ガ)聞しめして、	それになむ、(帝ガ)のたまひあづけたる。	それ・帝→それ
(19)	14 7	むかし、津の国にすむ女ありけり。	それをよばふ男ふたりなむありける。	女→それ＝女
(20)	14 7	それをよばふ男ふたりなむありける。ひとりはその国にすむ男、姓はうばらになむありける。いまひとりは和泉の国の人になむありける。姓はちぬとなむいひける。かくて	その男ども、としよはひ、顔かたち、人のほど、たどおなじばかりなむありける。	男ふたり(ひとり～ひとり～)→男ども
(21)	14 7	～女、「ここにもき思ふに、人の心ざしのおなじやうなるになむ、思ひわづらひぬ。さらばいかがすべき」といふに、そのかみ、生田の川のつらに、女、平衆をうちてゐにけり。かかれは、	そのよばひ人どもをよびにやりて、親のいふやう～	「人」→女(付加的説明)→そのよばひ人
(22)	14 8	～蘆になしたる男のかたあめのやうなる姿なる、この車の前よりいきけり。	それが顔を(女ガ)見るに～	男→それ＝男
(23)	14 8	それ(＝男)が顔を(女ガ)見るに、	その人(＝男)といふべくもあらず～	※コノ不可
(24)	14 8	～この男の顔を(女ガ)よく見るに、	それ(＝男)なりけり。	※コレ不可
(25)	15 9	染殿の内侍といふ、いまずかりけり。	それを能有の大臣と申すなむ、ときどきすみたまひける。	染殿の内侍→それ＝染殿の内侍
(26)	16 8	この大徳の顔かたち、姿を(内舍人ガ)見るに悲しきことに似ず。	その人(＝大徳)にもあらず、影のごとくなりて、ただ鏡をのみなむ着たりける。	※コノ不可
(27)	16 9	この兄の顔のいとをかしげなりければ、(内舍人ハ)目をとどめて、	「その子、こち率て来」と(女ニ)いひければ～	※会話文(人物と対象の距離)
(28)	17 0	伊衡の宰相、中将にものしたまひける時、故式部卿の宮の別当したまひければ、つねにまゐりなれて、御たちも語らひたまひける。	その君、内よりまかてたまひけるまゝに～	伊衡→その君＝伊衡

番号	章段	対人物ソ系指示語の直前部	「ソノ+人物」～・「人物を指すソレ」～	焦点となる人物
(1)	1	先だちてよりいひける男は、官まさりて、その時の帝に近う仕まつり、のちよりいひける男は、	その同じ帝の母の御あなすゑにて、官は劣りけり。	先の男・帝→後の男・帝
(2)	2	また、この男の、懲りずまに、いひみはいずみある人ぞありける。	それぞ、かれを憎しとは思ひはてぬものから～	人→それ＝人
(3)	2	～この女のもとより、「そのおもしろかなる菊一枝折りて」と（男二）いひおこせたらば、	その使に（男方）問へば～	女（女の使）→その使
(4)	5	～（男方）ながめむるに、友だちのもとより、かくぞいひたる。～歌～さて、	その友だちの久しく訪れねば～	友達→友達
(5)	8	また、この男、おほかたなるものから、ときどき、をかきごとば（女二）いひけり。	それに、僕のいみじうおもしろきを折りて、男のいひやる。	女・男→それ＝女
(6)	10	また、このおなじ男、女どももありけり。	それ、来にけり。	女→それ＝女
(7)	16	また、この男、ものゝたより、聞きわたる人ありけり。	その人とは、この男にものいふ人は、友だちに～	聞きわたる人→その人
(8)	18	～（男方女房二）尋ねければ、（女房は）「いとものはかなきたよりにつけてありしことなり。	その人（＝仲立）はさだかにも知らじ。～」とぞいひける。	※会話文（人物と対象の距離）
(9)	18	～（男方女房二）尋ねければ、（女房は）「いとものはかなきたよりにつけてありしことなり。その人（＝仲立）はさだかにも知らじ。おのらも見しかば、はじめわたりの返りごとはすめりし。	その人（＝代筆）の、ものへいましぬめりしかば～」とぞいひける。	※会話文（人物と対象の距離）
(10)	22	この女ども、男の供なりける人に、「たれぞ」と問ひければ、	「その人（＝男）なり」とぞ（男の供が）答へけるに～	※会話文（人物と対象の距離）
(11)	23	また、この男、知れる人ありけり。	それに、この男、「ひさしくえあはぬ、来」などいひやりたれば～	知れる人→それ＝知れる人
(12)	24	つねに、ものいひつたへさする人に、（男ハ）たまさかにあひにけり。さて、	それ（＝ものいひつたへさする人）して、「～」と（女二）いはせけるを～	人・男→それ＝人
(13)	28	また、この男、音聞きに聞きならしたる女を、この男のもとに、来通ふ女もいくところぞありける。	それ（＝音聞きに聞きならしたる女）を、この男の名を借りてぞ、そこによはひする男ぞありける。	女A→女B（付加的説明）→それ＝女A
(14)	28	さりければ、（女房ハ）帰り来て、夜ふくるまでうかがひて、	その男の来て、（女二）ものいふを聞きて～	※「この男」との差別化
(15)	29	～（男ハ）知る人のありければ、文、時々、取り立てなどしけるをば、頼もし人とぞつけたりける。	それに、（男ハ）「はや、たばかれ」などぞ責めける。	知人・男→それ＝知人
(16)	36	（女ハ）もし、こもりゐて、すかす人もこそあれと思ひて、たえて、	その人（＝誰ソレ）の家とも（女ハ）いはざりければ～	※明示しない用法
(17)	36	～（女達ハ召使二）この男の供なる人と呼ばせて、「この、のぞきたまへる人は、この、南に宿りたまへるか」と問ふ。（男の供なる人）「さなり」（女達）「さて、	その人（＝男）ぞ」など問へば、（男の供なる人ハ）この男の名をぞ答へける。	※会話文（人物と対象の距離）

番号	章段	対人物コ系指示語の直前部	「コノ+人物」～・「人物を指すコレ」～	焦点となる人物
(1)	1	その里に、いとなまめいたる女はらからすみけり。	この男がいまみてけり。	女はらから→男
(2)	1 0	きてなむあてなる人にと（母ハ）思ひける。	このむこがねに（母ハ）よみておこせたりける。	※特定
(3)	2 1	（女ハ）～歌～とよみ置きて、いでていにけり。	この女、かく書き置きたるを、（男ハ）けしう、心置くべきこともおぼえぬを～	女→女
(4)	2 1	（男）～歌～	この女、いと久しくありて～	男→女
(5)	2 3	～男も女もはぢかはしてありけれど、男は	この女をこそ得めと思ふ。	※心話文（人物と対象の距離）
(6)	2 3	～男はこの女をこそ得めと思ふ。女は	この男をと思ひつつ～	※心話文（人物と対象の距離）
(7)	2 3	女はこの男をと思ひつつ、親のあはすれども聞かでなむありける。さて、	このとなりの男のもとより、かくなむ～	親・女→男
(8)	2 3	～（男ハ）河内の国、高安の郡に、いき通ふ所いできにけり。さりけれど、	このものと女、あしと思へるけしきもなく、いだしやりければ～	男→ものと女
(9)	2 3	～（男ハ）河内へいぬるかほにて見れば、	この女、いとう化粧じて～	男→女
(10)	2 4	～（女ハ）いとわむごろにひける人に、「今宵あはむ」とちぎりたりに、	この男来たりけり。	人・女→男
(11)	3 3	～天の下の色好み、源の至といふ人、	これももの見るに～	※言述直示性
(12)	4 0	むかし、若き男、けしうはあらぬ女を思ひけり。さかしらする親ありて、思ひもぞつくとて、	この女をほかへ追ひやらむとす。	親→女
(13)	4 0	～（男ハ）思ひはいやまさりにまさる。にはかに、親、	この女を追ひうつ。	親→女
(14)	4 3	～（また人ハ）～歌～といへり。	この女、けしきをとて～	また人→女
(15)	4 5	むかし、男ありけり。人のむすめのかしづく、いかで	この男にものいはむと思ひけり。	※心話文（人物と対象の距離）
(16)	4 5	蟹たかく飛びあがる。	この男、見ふせりて～	蟹→男
(17)	4 7	むかし、男、ねむごろに、いかでと思ふ女ありけり。されど	この男を、あだなりと（女ハ）聞きて～	女→男
(18)	5 8	～こともなきども女の、あなかなりければ、田刈らむとて、	この男のあるを見て～	女ども→男
(19)	5 8	～（女どもガ）集りて入り来ければ、	この男、逃げて奥にかくれにければ～	女ども→男
(20)	5 8	～（女どもガ）この宮に集り来ゐてありければ、	この男～歌～とてなむいだしたりける。	女→男
(21)	5 8	この男～歌～とてなむいだしたりける。	この女ども、「穂ひろはむ」といひければ～	男→女ども
(22)	6 0	～家刀自、まめに思はむといふ人につきて、人の国へいにけり。	この男、宇佐の使にていきけるに～	人・家刀自→男
(23)	6 1	むかし、男、筑紫までいきたりけるに、	「これは、色好みといふすき者」と、すだれのうちなる人のいひけるを～	※心話文（人物と対象の距離）
(24)	6 2	～（女ハ男二）もの食はせなどしけり。夜さり、	「このありつる人たまへ」と（男ガ）あるじにいひければ～	※心話文（人物と対象の距離）
(25)	6 3	三郎なりける子なむ、「よき御男ぞいで来む」とあはするに、	この女、けしきいとよし。	子→女
(26)	6 3	～この女、けしきいとよし。こと人はいとなさけなし。いかで	この在五中將にあはせてしがなど思ふ心あり。	※心話文（人物と対象の距離）
(27)	6 3	世の中の例として、思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬものを、	この人は思ふをも、思はぬをも、けちめ見せぬ心なむありける。	※特定
(28)	6 5	殿上にさぶらひける在原なりける男の、まだいと若かりけるを、	この女あひしりたりけり。	男→女
(29)	6 5	～（男ハ）人を見るをもしらでのぼりゐければ、	この女、思ひわびて里へゆく。	男→女
(30)	6 5	（男ハ）かくかたはにしつつありわたるに、身もいたづらになりぬべければ、つひに亡びぬべし、とて、	この男、「いかにせむ、わががかる心やめたまへ」と、仏神にも申しけれど～	男→男
(31)	6 5	～（男ハ）～歌～といひてなむいける。	この帝は、顔かたちよくおはしまして～	男→帝

番号	章段	対人物コ系指示語の直前部	「コノ+人物」～・「人物を指すコレ」～	焦点となる人物
(32)	6 5	～女はいたう泣きけり。「かかる君に仕うまつらで、宿世つたなく、悲しきこと、	この男にほだされて」とてなむ泣きける。	※会話文（人物と対象の距離）
(33)	6 5	かかるほどに、帝聞しめしつけて、	この男をば流しつかはしてければ～	帝→男
(34)	6 5	～（帝ハ）この男をば流しつかはしてければ、	この女のいとこの御息所、女をばまかでさせて～	男・帝→女
(35)	6 5	（女ハ）～歌～と泣きをれば、	この男、人の国より夜ごとに来つつ～	女→男
(36)	6 5	～（男ハ）あはれにうたひける。かかれば、	この女は蔵にこもりながら～	男→女
(37)	6 9	～かの伊勢の斎宮なりける人の親、「つねの使よりは、	この人よくいたはれ」といひやれりければ～	※会話文（人物と対象の距離）
(38)	7 9	御祖父がたなりけるおきなよめる。～歌～	これは貞数の親王～	※後注の書出
(39)	8 3	～（親王ハ馬の頭ニ）大御酒たまひ、禄たまはむとて、つかはさざりけり。	この馬の頭、心もとながりて～	親王→馬頭
(40)	8 7	ここをなむ蘆屋のなどとはいひける。	この男、なま宮づかへしければ～	土地→男
(41)	8 7	～衛府の佐ども集り来にけり。	この男のこのかみも衛府の督なりけり。	佐ども→男
(42)	8 8	むかし、いと若きにはあらぬ、	これかれ友だちども集りて～	※慣用的表現
(43)	9 6	～女の兄、にはかに迎へに来たり。されば	この女、かへでの初紅葉をひろはせて～	兄→女
(44)	11 5	男、「みやこへいなむ」といふ。	この女、いとなしうて～	男→女

表 4

[illegible]

カ シ コ 事 物	カ ノ 事 物	カ ノ 事 物	コ コ 事 物	コ レ 事 物	コ ノ 事 物	ソ コ 事 物	ソ レ 事 物	ソ ノ 事 物	てて空がに本岩コ長 あと白・当の彼マさ るばに歌た一文分へ ししはる行庫が一	成 立 段 階	章 段 番 号
	2		(1)		1	1	(5)	1		1	82
	1				1			1		1	83
										1	84
										2	85
										2	86
	2	(1)	(3)	2		(1)	(1)	(6)		1	87
1					1			1		2	88
										3	89
										3	90
										3	91
										3	92
										2	93
	1							1		2	94
										3	95
	1	(1)	(1)		1		(1)	1		3	96
										3	97
										3	98
										1	99
							(1)	(2)	1	2	100
										2	101
										2	102
										2	103
			(1)							3	104
										3	105
										3	106
1		(1)						1		1	107
										3	108
										3	109
										3	110
										3	111
										3	112
										3	113
										3	114
					1					3	115
										3	116
										3	117
										3	118
										3	119
										3	120
										3	121
										3	122
										2	123
										3	124
										2	125